

学力向上のための取組

学校教育目標 「笑顔生み出す児童の育成 ～感じる 考える 実行する～」

めざす児童の姿

身の回りの様々な課題に気づき【感じる】自分に必要なものや情報を判断したり【考える】異なる背景を持つ仲間と困難を乗り越えたりする【実行する】ような場面に対応し得る、確かな学力を備えた児童

◎学力補充

「つつがの日」の実施

毎月第4火曜日を「つつがの日」とし、児童一人一人に応じた学習指導の時間を確保する。内容は、昨年度までの個人カルテを参考にし、各担任が決定する。校内体制としては、全職員が学習指導に当たれるよう、水曜日日課とし、6時間目を低学年、7時間目を中・高学年の学力補充とする。
※バス変更なし

◎言語環境の整備

辞書引き学習の実施

3年生以上の児童を対象に、授業や家庭学習の中で国語辞典を活用させ、語彙力の向上を目指す。(低学年も学級の辞書を活用する)

つつがっ子五・七・五の実施

月に一回、学校行事等などの後に川柳を作成し、校内に掲示する。担当教員が評価する。

家庭音読の推進

毎日の家庭学習に音読を取り入れ、家庭と協力して取り組む。

漢字マラソンの実施

前学年までの漢字の定着を目指し、全学級で取り組み、カードに記録していく。

◎ノート指導の充実

ノートの構成や記号を統一することで、見通しをもって学習に取り組みせるとともに、年度替わりに担任が変わった時もスムーズに学習をスタートさせ、進めていくことができるようにする。よくまとめているものはモデルノートとして掲示する。

ノートづくり

- ①毎時間新しいページから書き始める。(授業内容が前の日の続きの場合は、続きから書く)
- ②めあてやまとめなど、大切な部分は赤で囲む。
- ③適用題で間違えた場合には、消さずに赤で正しい答えを書いておく。
- ④自分の考え方の間違いに気づいたら、消さずに鉛筆でチェック印をして、新しいところに書く。

学習ノートコンテストの実施

「学習量の確保」

「学習の質の向上」

授業改善

個人カルテの作成による実態把握・学習の動機付け

単元末テストの結果と日頃の授業の様子をもとに、担任が個人ごとのシートに評価する。年度末には単元末テストの達成率をグラフ化したものと標準学力調査の結果を一緒に綴じる。

個人カルテ
作成の意図

- ①児童が自分の弱点を把握し、「つつがの日」や毎日の自主学習において弱点を克服するための学習に取り組むことができるようにする。
- ②基礎学力が身に付いていない部分を把握するとともに、次年度の授業展開や学習指導に生かすようにする。

授業改善のポイント

筒賀小授業の五か条

どの子もわかる！

「i (愛)」ある授業実践のために

■第1条 「めあて」と「まとめ」が大切！

児童自身が「めあて」を設定し、「めあて」にそった「まとめ」を考えていくようにする。また、児童の思考の流れに添った構造的な板書とし、板書に合わせたノート指導を充実させることで「わかった」「できた」と実感できるようにする。

【板書の例】

5/20
P 24
② 問題文

④ 一のくらいが計算できないときは、どのようにして計算するといいのだろうか。

- ・おり紙が46まいある。
- ・28まいつかった。

⑤ 一のくらいが計算できないときは、十の位から1くりさげて計算する。

⑥ 一のくらいの計算が、 $16-8$ になっている。
・十の位から1もらっている (くり下がり)

考えを交流する際は木製ネームプレート
やホワイトボードを活用する。

ホワイトボード ホワイトボード ホワイトボード

※①日付 ②ページ数 ③問題 ④めあて ⑤自分の考え ⑥まとめにつながるキーワード
⑦まとめ → 板書に残すように意識する



【ノートの例】

5/20
P 24
② 問題文か要点をまとめたもの

(しき) $46-28$

④ 一のくらいが計算できないときは、どのようにして計算するといいのだろうか。

⑤ 一のくらいが計算できないときは十の位から1くりさげて計算する。

自分の考え

(にているところ)

- ・一のくらいの計算が、 $16-8$ になっている。
- ・十の位から1もらっている (くり下がり)

④めあて ⑤まとめ ⑥ふりかえり → 記号を統一して木製プレートを活用する

※ノートは、2年生終了時点で5mm方眼ノートに書けるようになることを目標とする。(児童実態に合わせて担任がノート選定することも可能)

※週に1回程度、担任からのコメントを入れて児童に返すようにする。

ノート指導の系統性

	書くこと	低学年	中学年	高学年
感じる	日付 ページ数	板書を写す		
	問題文	文字数が多い場合は、問題文を配って、大切な数字や演算決定のキーワードをチェックする。	教科書の問題を見て、問題文を写す。 図などは、少しずつ自分で書けるようにしていく。	教科書の問題を見て、問題文を写す。 早く書けた児童は、図や言葉の式を自分で書く。
	めあて	文が長い場合は、ノートにはるようになる。 (書く場合は赤で囲む)	板書を写す(必ず赤で囲む)	
	自分の 考え	絵や○などを書いて、答えを考えていく。 どのように説明するか、言葉を書いておく。	図や式、言葉を用いて、自分の考えた道筋が分かるように書く。 分かりやすいように、色を使って書く。	図や式、言葉を用いて、自分の考えた道筋が分かるように書く。(複数の方法で解く) 分かりやすいように、色を使って書く。
考える	ホワイト ボード	教師が説明に必要なことを伝え、書かせる。足りないところや不必要なところがあれば、説明が終わった後、修正する。	自分で必要だと思うことを書く。足りないところや不必要なところがあれば、説明が終わった後、修正する。	自分で必要だと思うことを簡潔に分かりやすく書く。足りないところや不必要なところがあれば、説明が終わった後、修正する。
	友達の 考え	自分では思いつかなかった考えや、説明を聞いて分かりやすかった考えを写す。		
実行する	まとめ	板書から今日の学習のキーワードを示し、担任と一緒にまとめる。	板書から今日の学習のキーワードを見つけ、担任と一緒にまとめる。 自分で書かせる場合は、上手にまとめた児童に発表させ、モデルとする。	板書の中にあるキーワードを考え、自分の言葉でまとめを書く。上手にまとめた児童に発表させ、モデルとする。
	振り返り	分かったことや、できるようになったことなどを書く。	分かったことや気が付いたこと、友達の考えを聞いて思ったことなどを書く。	分かったことや気が付いたこと、次に考えてみたいこと、友達の考えを聞いて思ったことなどを書く。

■第2条 児童の瞳が輝く「導入」を！

児童が、より「やってみたい」「おもしろそう」と思える素材を生活場面や物語などから探して教材化したり、知的好奇心を揺さぶるような問題設定を工夫したりする。

■第3条 「発問」で勝負！

できるだけ短い言葉で端的に問う。また、「なぜ?」「どうして?」「どうする?」などの切り返しを工夫し、児童の思考に揺さぶりをかけることで考えを深めさせていく。

■第4条 「見通し」を明確に！

児童が主体的に学習を進めようとする時、授業の展開を理解していることが重要となる。そこで、単元の学習計画や、本時の「学習の進め方」を黒板脇に掲示するなどして、児童が意識して取り組めるように支援する。また児童の思考の流れに添って授業をデザインする。

■第5条 「児童の言葉」で授業を創る！

授業のねらいに迫る児童のつぶやきなど、ちょっとした発言でも拾い、全体に広げるようにする。また、間違いは切り捨てるのではなく、間違いからも学ぼうとする学習の雰囲気を作る。